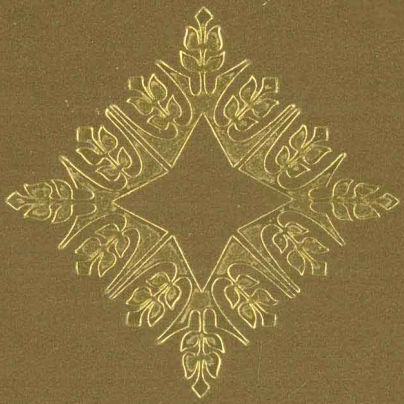


昭和萬葉集

昭和四十七年

巻十七

講談社

昭和萬葉集　巻十七

定価　一、六〇〇円
昭和五十五年六月二十八日　第一刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替　東京八―三九三〇

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　牧製本印刷株式会社
用紙　東洋クロス株式会社
　　王子製紙株式会社
製函　株式会社岡山紙器所
©講談社　一九八〇年　Printed in Japan

0392-441179-2253(0)（昭萬）
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集　巻十七／目次

口絵
凡例

I

戦争の傷痕
還らぬ人を 35
ルバングの日本兵 37
原爆の記憶 37
兵たりし日に 39
銃後にありて 41
抑留・引揚 43
消えさらぬ戦禍 44
戦跡に立ちて 47

反戦の声
反戦デモ 47
新空港反対闘争 49
学園紛争その後 50
ベトナムを思う 52
基地 53
難民 54

II

揺れ動く日本
横井さん帰る 10
浅間山荘事件 13
テルアビブ事件 17
沖縄の本土復帰 19
沖縄の声 21
日中国交回復 22
中国国連加盟 24
列島改造の波 25
公害・大気汚染 27
高松塚古墳発見 30
宇宙時代 31
ジャコビニ流星雨 32
オリンピック 32
川端康成の死 34

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生きゆく日々

朝の歌 56
夕べの歌 58
夜の街で 61
夜の歌 62
生活の断片 67
ひとりの想い 69
わが日々 71
差別との闘い 74

生活の歌

生活の歌 76
主婦日常 78
団地の日々 79
わが街 80
街の風景 81
裏町 83
酒の歌 84
車中にて 86
ある光景 87
世相 88

Ⅲ

きびしい農業

減反・休耕田 92
離農・過疎 93
出稼ぎ 95
農に生きる 96
米作り 98
農作業 100
家畜 104
果樹園 106
農村風景 107

仕事の歌

海辺にて 110
山にはたらく 111
炭坑にて 113
職人の歌 113
工場にて 115

鉄道員 117
順法闘争 117
教師 119
医師とその妻 120
看護婦・助産婦 123
商人の歌 124
さまざまな職業 125

はたらく人々

通勤 130
職場日常 131
定年・退職・倒産 134
団交・スト 136

IV

愛と死

愛の歌 140
父母 144
父母の死 148
父母を偲ぶ 151
夫 154
夫の死 157
夫を偲ぶ 158
わが妻 161
姑と嫁 165
みどりご・幼な子 166
わが子 167
嫁ぎゆく子 172
病む子 174
亡き子 175
孫 177
兄弟・祖父母 178
師・友 180
挽歌 181

病み臥して

療養の日々 183
癌 189
手術 190
不自由な体 190

V

四季の歌

春 194
春の花々 196
夏 201
夏の花々 204
蟬 207
秋 208
秋の草花 211
紅葉 213
冬 214
冬の樹々 216
冬の海 218
雪 218
歳末・新年 221

自然の姿

霧・雨・雲・月 224
海・湖・川 227
山と渓谷 230
鳥 234
動物 238
虫・魚たち 240
草木 241
旅 244
外国の旅 249
旅情 254
名所・旧跡 256
ふるさと 257

VI

くさぐさの歌

歌会始 260
外地にて 261
過ぎし日を 262
老境 263
生と死 267
書・美術・神仏 269

獄中の歌 270
くさぐさの歌 272
現代の歌
青春 273
若き情念 277
女歌 280
民俗 285
わが心象 286
わが思い 289
折々の歌 291
人間への問いかけ〈昭和短歌史概論〉……294
高度成長がもたらした自然の死〈昭和史私論〉——山田宗睦……300
年表……310
作者略歴・索引……311

脚注目次

〈揺れ動く日本〉
揺れ動く日本列島——10
横井伍長帰還——11
浅間山荘事件——14
連合赤軍——15
大量リンチ事件——16
テルアビブ空港乱射事件——17
沖縄の本土復帰——18
沖縄県発足——19
屋良知事——20
外務省公電漏洩事件——21
自衛隊移転問題——22
日中国交正常化——23
パンダ・ブーム——24
日本列島改造論——25
「角栄ブーム」——26
「三角大福」——27
土地投資——28
光化学スモッグ——30
四日市公害——31
高松塚古墳壁画——32
科学の新動向——33
ミュンヘン・オリンピック——34
冬季オリンピック札幌大会——34
川端康成の死——34
〈戦争の傷痕〉
ルバング島の元日本兵——37
四次防計画——40

遺骨収集 46
〈反戦の声〉
戦車輸送阻止闘争 48
北爆の再開 51
パリ秘密会談 52
立川基地強行移駐と反戦自衛官 53
インド・パキスタン平和協定 54
〈生きゆく日々〉
生きゆく日々 57
深夜放送の変化 65
深夜の騒音 66
部落解放問題 74
在日朝鮮人問題 74
〈生活の歌〉
物価の上昇 76
土地問題 79
日照権 80
深くなる地下駅 83
自動車事故 84
洋酒の普及 84
バイコロジー 86
モノ・セックス 88
SLブーム 88
〈きびしい農業〉
農業政策の貧困 92
農村の交通問題 95
新しい農業 97
生産者米価の引上げ 99
農村の生活環境 109
〈仕事の歌〉
漁業問題 110
石炭産業の行方 113
伝統的技能の見直し 114
マンモス・タンカー 115
北陸トンネル列車火災事故 116
鉄道一〇〇年 117
順法闘争 119
偏差値問題 120
勤労者所得 126
〈はたらく人々〉
余暇の利用 130
職業病全国交流集会 132
〈愛と死〉
暴走族 171
結婚と離婚 172
森永砒素ミルク事件交渉 174
渡辺順三の死 181
〈自然の姿〉
東京湾の汚染 227
秘境ブーム 230
アンノン族 246
古代史ブームと文化財保護 249
海外旅行ブーム 250
故郷志向 258
〈くさぐさの歌〉
歌会始 260

1本全集は、昭和元年から五十年までの間につくられた短歌を対象として、一般投稿歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌等々を、選者の選をへて編纂した。

2収録作品は、作歌年（作者本人の申告もしくは初出掲載誌発刊年等）によって分類し、年代順に巻分けを行なった。

3各巻内は、作品のテーマ、素材により分類・配列した。また分類ごとに初出作品の上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4作者名の下に、生（没）年、出典、小題等を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末につけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は…で示した。

〔例〕大8…〈生年のみ判明〉
…昭20〈没年のみ判明〉

・出典は、原則として編纂部が典拠としたものを示した。『　』は歌集、「　」は新聞・雑誌などを、また（　）内の数字は、刊行年、刊行年月（日）号を示す。

〔例〕『形相』（23）〈昭和二十三年刊〉
「アララギ」（17・2）〈雑誌「アララギ」昭和十七年二月号〉
「朝日新聞」（17・12・8）〈昭和十七年十二月八日号〉

・二首以上の収録作品で、出典が複数となっている場合の表示。

〔例〕「アララギ」（17・9、10）〈九月号と十月号〉
「アララギ」（17・9）＝三首（18・3）＝二首〈十七年九月号から三首、十八年三月号から二首〉

・必要に応じて、出典の下に原典につけられた小題を付した。

〔例〕『露原』（22）―食生活〈歌集『露原』にある「食生活」という小題のついた一連からの抄出〉

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表作の典拠等を〈　〉内に記した。

〔例〕〈北支にて〉〈日記より〉
〈沖修二『阿南惟幾伝』（45）より〉

5戦後の現代かな使いによる作品を除いて、作品の表記は旧かな使いを原則とした。なお、漢字は原則として新字体を使用し、よみがな（ルビ）は編纂部の判断で加減した。

6作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお（　）内は執筆者名。

・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解を生じやすい語などに語注をつけた。

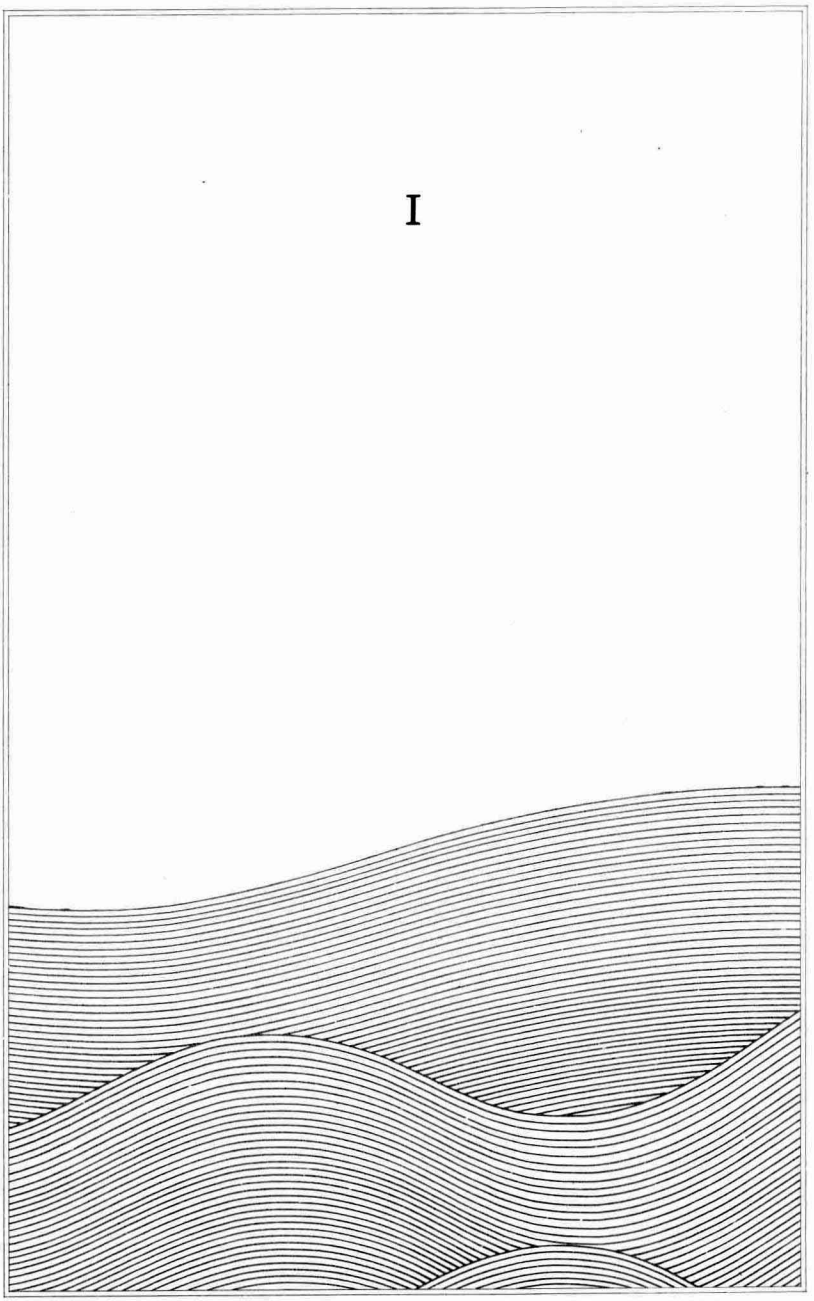
・収録作品につけられていた詞書は、必要に応じて〔詞書〕と頭につけて脚注欄に引用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当する脚注の頭に、＊または＊＊をくりかえし付して、対応させた。

■本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在不明等のため、連絡のとれない方があります。巻末作者略歴・索引の＊印を付した作者がこれに該当しますが、お心あたりの方は、編纂部まで御一報くださいますようお願いいたします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I



揺れ動く日本

太田青丘　明42～『遡源』(48)

三十年の時を逆転し孤島なる密林より這ひ出し土色の兵

西　要山　明41～「短歌芸術」(47・6)

二十八年穴にこもりて在り経つつなにを求めて堪忍(たへしの)びたる

猿石道伯　明31～昭49「心の花」(47・5)

衣食住のすべて自給自足にて二十八年を生き抜きたりし

石黒清介　大5～『栃尾』(51)

死すべきときを失ひしかば生きのびてひとはかへり来ぬ銃をかかへて

三浦淑子　明44～「アララギ」(47・5)

天皇陛下にお返しすると二十八年穴居(けつきよ)の兵は朽(く)ちし銃持つ

山田ひさ子　大5～「コスモス」(47・5)

孤(ひと)りせし長きたたかひ終へにたる人帰り来ぬ小銃抱きて

横井さん帰る

揺れ動く日本列島　一九六〇年代のいわゆる経済高度成長は、日本を「経済大国」の位置に押し上げた。そして、一九七〇年代にはいって、その「成長」はさらにはかり知れない大きさで継続しているかに見えた。しかし、国際関係は刻々に変動し、日本に先立って米国が中国に接近すると、頑固に中国を認めようとしなかった日本政府は、あわててそれまでの方向を転換しなければならなくなった。また沖縄返還がようやく実現したが、基地問題は解決せず、さらに日本列島は、いわゆる北方領土問題が解決されないため、明治初年の固有領土への回復も、その実現の可能性はまったく見込みの立たない状況であった。その日本列島は、昭和四十七年七月、あらたに発足した田中角栄内閣が「列島改造」の構想で景気よく未来像を描いてみせたが、環境破壊はますます深刻になり、食糧自給態勢は破綻状態となり、いわゆる経済成長の「ひずみ」がつぎつぎに表面化した。まさに日本列島は揺れ動き、翌昭和四十八年の石油危機を迎えるのである。(原田勝正)

小勝誠吉　明35～「心の花」（47・4）

恥づかし乍ら横井は帰りましたと云ふテレビの前に嗚咽（をえつ）す我は

現人神（あらひとがみ）が人間に戻り給ひしをあはれあはれ横井氏は知らず

葛井加容子「朝日新聞」（47・2・26）

玉砕のさまを陛下に申したきと生き残る兵の言葉切なり＊

寒川　治　大8～「朝日新聞」（47・1・29）

千万の言葉にまさる泪もて滅私の勤務いまし君了（お）ゆ

佐々木昭元　昭7～「未来」（47・4）

復員という言葉いたいたしふゆくさに陽はさし横井伍長帰り来る＊＊

斎藤久治　明28～「まひる野」（47・5）

今の世に薄らぎているもの持ちて帰り来ませる横井庄一

扇畑利枝　大5～「女人短歌」（47・91号）

信じがたき一人の兵の生還に泪あふれき日本人として

古屋利之　明26～『白嶺』（51）

横井伍長帰還　昭和四十七年一月二十四日、グアム島のジャングルで元陸軍伍長横井庄一が発見され、二月二日帰国した。グアム島の日本軍玉砕から二十七年半、洋服縫製師としての生活技術が、この長い年月の生活を支えていたといえる。同時に天皇への忠誠意識と戦陣訓への服従意識がそのまま持ち越されていた。帰国の挨拶に「横井庄一、恥ずかしながら帰って参りました。天皇陛下に銃をお返し致します」といい、病院で療養の後、皇居前に出たとき「天勾践を空しうする勿れ」と児島高徳の故事を自分になぞらえた。ジャーナリズムは、きそってこの事件と彼の言行を採り上げ、何冊もの出版物が出された。「最後の日本兵」としてこの事件は喧伝されたが、遺家族のなかには、肉親の死をふたたび想い起こす人びとも少なくなかった。（原田）

＊玉砕＝名誉・忠節を重んじていさぎよく死ぬこと。

＊＊復員＝戦時体制にある軍隊を平時体制に復し、将兵の召集を解除すること。

伍長＝旧陸軍下士官の階級で、軍曹の下位で兵長の上位。

満月の去来をひとり数へつつその歳月は知りしといふか

中河幹子　明28～『悲母抄』(50)

ゆがみたる人らの訊問に惑ふなく天皇をあがめ生き来しといひし＊

高橋華子　大5～「アララギ」(47・5)

ジェット機を高速飛行機といひたりし横井軍曹にしたしみ覚ゆ＊＊

中山礼治　明45～『黄蜀葵』(53)

ジャングルに二十八年生き続けし兵を支へしものも「幻想」

田島采陽　明37～「コスモス」(47・5)

戦ひは二十八年今日よりはこの一人に戦後はじまる

山下喜美子　明44～「短歌」(47・4)

生還せし老兵のこと讃ふこゑしづまりゆけばその人思ふ

氷上寿夫　大5～「塔」(47・6)

わがうちの横井庄一まざまざと甦り而も机を打てり

大串明子　「朝日新聞」(47・11・19)

＊あがめ＝うやまい。

＊＊軍曹＝横井庄一は帰国後、ポツダム政令によって軍曹となった。

ジャングルに戦後終らずわが身にも終らぬ戦後いくつか潜(ひそ)む

斎藤田鶴子　大1～「心の花」(47・4)

過ぎし吾が二十五年と照しみぬグアムの穴深く生き抜きしひとあり*

石原　隆　「朝日新聞」(47・2・26)

抑留のこと語らずに老いし父グアム島よりのニュースに見入る

高柳　晋　「朝日新聞」(47・3・4)

彼のみを英雄にするは許せぬと顔こわばらす戦没者遺児

林田美元　大4～「女人短歌」(47・94号)

生きてまさば横井氏の如く生還も夢にはあらじ亡き夫を恋ふ

筧　鳰湖　「朝日新聞」(47・4・9)

絶望し待つこと止めし我なれど生きて帰りたまう横井氏があり

中沢華人　明38～「まひる野」(47・5)

肉親の呼びかけ雪の山に消ゆ山荘に赤軍の若者籠(こも)る

柳沢文雄　明44～「コスモス」(47・5)

*グアム＝西太平洋、マリアナ諸島南端の島。面積五四一平方キロ。ミクロネシア最大の島。スペイン領であったが一八九八年米国領となり、太平洋戦争開始とともに日本軍が占領、昭和十九年八月十日、米軍が奪回した。

赤軍派村に潜入すと告げて霜夜の闇に放送つづく

雑賀寿治　明34～昭50　「コスモス」（47・6）

実弾に人の傷つく攻防をドラマの如くテレビに見てをり

栗山とし子　大9～　「コスモス」（47・6）

単音の玩具のごとき銃声のあと人死すとアナウンスあり

山荘の軒のつららの影うつる壁をこぼつと鉄球うごく*

五反田　勲　大11～　「表現」（47・5）

眼を撃たれ担架に運ばれし警官の遂に死にきと短く伝ふ

塩川光男　大14～　合同歌集『ふもと5』（47）

殉職の遺体を載せしヘリコプター満月を背にいま着地す

横江ふみ　明37～　「朝日新聞」（47・4・2）

狂いたる青年の誰かやさしくて人質にこっそりお守りくれしと

若月芳夫　明39～　「心の花」（47・5）

たたみかけて妻を返せと呼びかくる夫の叫び虚しくつづく

*こぼつ＝毀つ。こわす。鉄球＝建物を解体するときなどに用いる鉄製の球。

浅間山荘事件　群馬県下で逮捕を免れた連合赤軍の五人は二月十九日午後三時三十分、長野県軽井沢の河合楽器保養所浅間山荘に乱入、管理人の妻を人質にしてたてこもった。警官隊は一五〇〇人を動員し、二十八日午前九時五十五分、最後の警告を行ない、クレーン車で破壊作業を開始、午後六時すぎ、警官隊が室内に侵入して二一八時間ぶりに人質を救出、五人を逮捕した。この間、警察官二人をふくむ三人が死亡、二三人が負傷した。この日、朝からテレビ各局は軽井沢からテレビ中継放送を実施、他の番組、とくに国会の四次防予算先どり問題を審議中の衆議院予算委員会の模様も報道せずに、この事件の報道をつづけた。（原田）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com